



特集：三重県
未伝地伝道



P2-4

» 「フィニッシング
・ザ・タスク！」

P6

OM日本
総主事より

» 華やかに聞
こえるけど

P5



自分の思い通りになる人生を願いません



新型コロナウイルスに世界が変化・翻弄されるなか、落胆し、時に涙を流しながらもロゴスホープ号乗船を遂げた木村真梨江真さん（岐阜県）の報告です



「本当に行けるの？」 ログスホープ号乗船までの道のりで、私が人々から一番多く受けた質問です。私自身も、時には落胆し、時には涙しながら、何度も主に尋ねました。

ログスホープ号を知ったのは、2019年の秋頃でした。当時、小学校で教員をしていた私は、日々の忙しさに追われていました。「すべて疲れた人、重荷を負っている人は私のところに来なさい。私があなたがたを休ませてあげます。」その御言葉が示され、主のより近くで生きる必要があると感じました。仕事を辞めて、国内外問わず、どこかの聖書学校に通おうと考えていたところ、牧師からログスホープ号の話を知りました。その時は、想像のつかない船の上での生活に対し、あまり良い印象を持ちませんでした。しかし、神様の計画は私の考えを遥かに越えるものだと思い、その道に進んでみようと思いました。

心に大きな動揺が走ったのは、2020年3月、国内の学校が休校となった時です。あと1か月、大切な子ども達とかけがえのない時間を過ごし、感謝と喜びを持って、自分のこれからの人生について伝えるつもりでしたが、全てが出来なくなりました。私の決断は間違っていて、神様はこの道を祝福しておられない、とも感じました。しかし、ただ主に信じようと思い、学校を離れました。

乗船に向けて、本格的に準備を始めたのはそれからのことです。混乱が続く世の中でしたが、OMスタッフの方とは、9月乗船を目指して、出来る限りの準備を進める、という話をしました。コロナウイルスの感染を防ぐために、日本から船までのフライトではハイリスク国を避けること、出国前に

PCR検査を受けることなど、船から様々な指示があり苦労しましたが、私の道は少しずつ開かれていきました。

9月乗船の夢が現実味を帯びてきた頃、私の心は再び大きく揺さぶられることになりました。日本を離れる約2週間前、直前にしてフライトがコロナの関係でキャンセルになったからです。そのフライトが唯一日本から船が停泊予定のバハマまで行けるものでした。完全に道が閉ざされたと思いました。しかし、神様の恵みと多くの人々の祈りによって、船がその時停泊していたキュラソーという国で乗船する方法が示されました。自宅から乗船するまでは約2日半かかり、初めての海外旅行、初めての飛行機乗り継ぎ、初めての空港での寝泊まり、それも全て私1人で、という大冒険でした。

「私は自分の思い通りになる人生を願いません。あなたの栄光が現れるために私を用いてくださるなら私は喜んで進みます。船に乗っても乗れなくても感謝します。」これは私が乗船するまで祈り続けたことです。今、私はログスホープ号での生活において、様々な葛藤や苦悩を抱えています。また、船の本屋としての働きは出来ておらず、船外での奉仕も簡単ではない状況にあります。しかし主が私の祈りを聞き、この時、この場所に私を導いて下さったという強い確信があります。自分がここで何が出来るのか、今はまだ分かりませんが、主の栄光が現れることを祈り、感謝の心を忘れず仕えていこうと思っています。目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、また人の心に思い浮かんだことのないものを、神は神を愛する者たちに備えてくださいました。これからも主が見せてくださる素晴らしい計画に期待しながら、良い管となって神様の愛を流していきたいです。

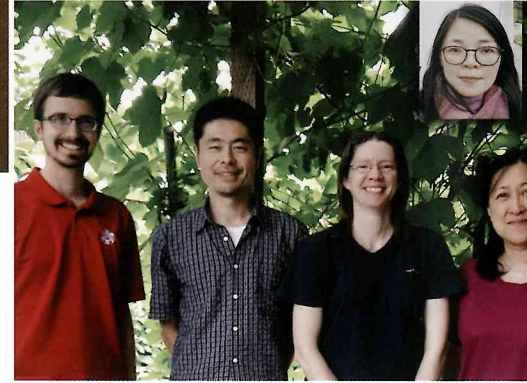


日本

「誰も見たことのないことが」 三重チーム活動報告

1

カナダで主に出会った近藤さんは、16年間の海外宣教を経て、教会の無い自分の生まれ故郷での未伝地伝道を始められました。その後新たに三人のOM宣教師を与えられ、「三重チーム」として地元の伝道、そして近隣教会の支援、災害支援とマルチに活動をしています。



鈴峰地区と自分

「今まで」を振り返れば、何から何まで神様がしてくれたのだと思います。私たちが活動する場所は、私が生まれ育った「鈴峰地区」という土地で、かつては霊峰と書かれ、ヤマトタケル、樺大神社、おんべ川と日本の古代史に名を載せる数々のものがある、神社仏閣の因習の深いところです。人口1万2千人で、私たちが活動を始めた近年まで、2千年ほどの歴史の中でキリスト教会はひとつもありませんでした。小学校のサマースクールはお寺、習字の稽古もお寺、剣道の習いは神社で神主さんからの指導。何から何まで神道や仏教の祈祷、お経、瞑想を通していました。なので幼少と青年時代、私はキリスト教に会うことも、教会に足を踏み入れることもなく過ごしたのです。そして、何から何まで自分自身の力に頼っていた私は、今思うと「威張っている田舎の大将」というかんじでした。

救いの証

そんな中、20歳の時にワーキングホリデーで一年、カナダに住んだことがきっかけで、初めて教会の門を潜るきっかけができました。「真実を求めていた」というカッコいいものではなく、私のホストファミリーが信仰しているキリスト教が間違っていることを証明するためにでした。「宗教=間違い」「信仰=弱虫」というのが自分の辞書でしたから。そんな思い上がった私の鼻っ柱を主はカナダ

において、砕かれたのです。まったくわからない英語、家族にも頼れず、病気にもなる…様々な苦勞と生活不安の中에서도落胆と挫折の中でもがき苦しんだ一年でした。そんな中で、やさしくしてくれるクリスチャンの方や、教会という場所、いつしか自分にとって必要な場所になっていったのでした。もちろん教会の中で人間を見て、落胆し、教会やクリスチャンの交わりに行くのをやめたことも何度かありました。でもその都度、主が誰かを私に送ってくださって、教会にカムバックするのです。そしてその3年後、日本とカナダを行き来する生活をおくったあと、カナダにて主であるイエスキリストを受け入れ、洗礼も授かり、信仰者としての人生をスタートしたのでした。

日本へのリターン

主はその後、私を16年もの間、ウイクリフ聖書翻訳協会(Wycliffe Bible Translators of Canada)という宣教団体のマルチメディア・デザイナー宣教師として、カナダ、フィリピン、そしてアジアの諸国で使ってくれました。そんななか、だんだん自分の母国である「日本」に対して重荷を持つようになったのです。私が見たアジア諸国での主の働きや教会と比べると、日本の状況はあきらかにどん底にあったからでした。その数年前から、私は心の中で「日本の故郷と家族」のことをしばしば思うことがありましたが、その度に「いや。あと10年後…」

とっていました。なぜなら私は「日本が嫌い」でカナダに行った日本人、「日本を捨てた」日本人でした。通常、自力でカナダや欧米に移った日本人が日本に帰ってくることはありえないのです。なので「宣教のために日本へ」というのはすごく恐れがありました。そんな迷いを取り払ったことのひとつが2011年に日本を襲った東日本大震災でした。カナダから岩手県に災害ボランティアとして三週間働きました。そして過疎化の被災地で、被災者の老人の方々と話していたとき、こう思いました。「もう10年なんていってられないんだ。10年経ったらこの人たちはもういない。10年先じゃなくて、今なんだ」と。

それから1年後、私たち家族は日本に引越していました。引越しまでの道のりも色々ありました。挫折、父の末期癌発見、日本での宣教の奉仕内容、支援教会の献金。しかし最終的に主は全てを備えてくれて、私たちは鈴峰に引越してことができました。最初の3年半は、当時の所属団体であるウイクリフ聖書翻訳協会の奉仕内容であるデザイン業務をテレワークでやり、その傍らで鈴峰のひとびとに福音を伝えようと思いました。海外と勝手があまりに違い、最初はどうやって伝えれば良いのか分からないでいました。一般に多くの教会で行う伝道活動のほとんどは、教会堂でイベントや塾などを開いてそこに未信者を誘う、「勧誘活動型」です。しかし、この鈴峰地区

- 1) 毎週水曜夜の礼拝「ファミリーチャペル」(通称ファミチャ)は超教派の賛美集会で、どんな方でもウエルカム。私たちのリビングルームで行います。
- 2) 海外の短期宣教チームと共に、鈴峰地区にある900m級の山を登り、頂上にある神社において、とりなしの祈り。そして山頂から平野部を見下ろし、土地の癒し、家族・夫婦関係の回復を祈り、イエス・キリストの勝利を宣言。
- 3) 主が与えた三重チーム。さらに新しく宣教師が与えられて5人となりました。
- 4) 各集落におけるとりなしの祈り「プレイヤーウオーク」をします。祈ったところは地図上に記録していきます。5) ミュージシャンの横山大輔&和子を交えての礼拝。ファミチャは子供も大人も楽しめる礼拝で、たくさんの宣教師をゲストとして招きます。ファミチャでは日本語・英語・手話を用います。



に教会はありません。種まきもまったくされていないところなのです。なのでとにかくやれることをやろうと思いました。学校でボランティアをしたり、地元の消防団(自警団)に入ったり、地元の秋祭りのやぐらで賛美を歌ったり。

ターニングポイント

そんな中、闘病中だった私の父が、母の通っていた津市の教会の牧師から洗礼を受けました。(母はその2-3年前に受洗していました)父は田舎の本家の長男で、宗教的に様々なことを受け継いでおり、庭の林には稲荷神社、お向かいのお寺の檀家で寺世話というお役目もしていました。檀家を抜くこと、神社をどけること、親戚の同意を得ること、ハードルは数々ありました。ですが主は、その全てのハードルを退けてくださり、父は受洗に到ることができたのです。

そしてその半年後、父は亡くなり、私たちは父の葬儀を地元の公民館で行いました。私たちの村では、各家から一人づつ代表がくることになっていましたから、「福音を伝えるならこの時だ」と思いました。教会堂はありませんが、津市の教会のかたに手伝ってもらい、キリスト教式で賛美、しかも父が生前制作した手製の十字架を使って、イエスキリストの十字架と救いについて話す機会が与えられました。それからしばらくしてからでした、私たちに対しての村人の反応がかわったことに気が付いたのは、あげくのはてに村の最長老が私たちの家に訪ねてきて「どうやってお寺の檀

家を抜けたのか、そのやり方を教えて欲しい」といってくる始末でした。この出来事を機に、私たちは鈴峰地区での福音伝道のために本腰をかけて従事すべく、二年弱かけて宣教団体をOMに移しました。

主が集めてくれた仲間

最初は近藤家だけで始めたミニストリーも、たくさんの短期宣教師に来ていただき、2018年秋にはカナダ人の男性宣教師が長期で与えられ。そしてコロナの中、2020年春にはシンガポール人の女性宣教師が長期で与えられました。そして2020年11月に新たにマレーシアからの宣教師を長期でお迎えしました。伸ばし伸ばしにして迷っていた日本での郷里伝道のために、こんなに主が与えてくれました。「日本の地方農村部において教会開拓はありえない」という定説をこわせたような気がします。今、名もなかった鈴峰地区において、主が「誰も見たことがないこと」をなさっていることを信じています。

三重チームの活動1 祈り

鈴峰地区はその2千年近い歴史の中で今まで教会が存在しませんでした。教会がないということは、キリスト者がほんのひとにぎりいたとしても、彼らが集まる場所も機会もない。群れで賛美をすることも、祈ることもなかったということです。この硬い土地にいきなり種をまくことはできません。そこでプレイヤーウオークと言う祈りながら歩いて土を耕すことを始めました。鈴峰地区内にある31の各集落を、ゼンリ

“ どんなに小さくてもけって当たり前に思わず、神様のおかげにします。どんな小さな働きでも、主に感謝するところがあるのです。

ンの住宅地図を使い、その全ての道路を歩いて回ります。歩いたところは蛍光ペンで印をつけます。一つの集落につき、お寺2件と神社1件。このような神社仏閣を霊的な砦として重点的に祈ります。また祈りのカードを各集落ごとに作りました。各カードには集落の名前、小学校の校区名、神社仏閣の名前が日本語と英語のバイリンガルで表記されています。そしていつも集会有るごとに、このカードを使用して祈ります。一家庭の癒し、親子関係の修復、霊的な開放、福音が述べ伝えられるよう。また、祈りの歩行に加えて、祈りの登山も行っています。

活動2 既存教会と共に

私たちのもうひとつの特徴は、鈴鹿市と四日市にある多数の教会と色々な形で交わり、そしてまきこんで活動をしていることにあります。例えば、海外の短期宣教チームが来ると、私たちはその方達を近隣の諸教会の奉仕のために派遣します。チー

フィニッシング・ザ・タスク！

スティーブン スミスドルフ

OM日本代表、妻の契子と3人の子供達、モーゼ(19)、恵真(16)、ヨハン(13)と共に宮城県登米市在住



愛する皆さん、

私たちの人生で経験したことのない、普通とは違う年も年末を迎えようとしています。日曜には教会に行くというような、皆さんが当たり前としてきたことが変化し、複雑になった年でした。色んな事への考慮が必要になりました。移動しても大丈夫だろうか、グループで会うことは？周りの人に危険を与えないだろうか？オンラインのメッセージを聞こうか、それとも教会に行こうか？変化したのは教会生活だけでなく、宣教においても同じです。多くの事がオンラインで行われるようになりました。しかし宣教の使命は変わりません。今もイエス様の事が伝えられていない民族が何百と存在します。日本の教会にはこの使命に貢献する責任が与えられています。

先日、私はフィニッシング・ザ・タスク (FTT) という400名の日本人牧師、宣教師が参加する世界宣教カンファレンスにパネラーとして参加する機会が与えられました。そこで質問は、「日本人として、どのように世界宣教に貢献できるでしょうか」という質問でした。その時の私の発表をここでも分かち合わせて下さい。皆さん一人ひとりの上に主の豊かな励ましと祝福がありますように！私は日本人が世界宣教において、特に、3つの分野で大きな貢献ができると思います。

① まず、最初の分野は**災害支援**です。

日本人は自然災害についてよく理解し、どのように対応するべきかを心得ています。東日本大震災から阪神、熊本地震、最近日本を襲った勢力の強い台風や洪水被害などに対し、日本の教会の対応は本当に素晴らしいものでした。災害に対する経験や知識は世界の多くの国やコミュニティを祝福することのできるスキルだと思います。OMのような多くの宣教団体では災害支援をメインのミニストリーとし、特別なトレーニングを受けている人々がいます。この分野における日本人の貢献はとても大きいと考えています。

② 2つ目の分野は**コミュニティ支援**です。

日本人はコミュニティに関することや責任についてとてもよく理解しています。朝早くから町のスピーカーからは、その日のイベント案内や、作業についてのアナウンスが流れます。日本人はコミュニティでの互いの責任をととても重視します。このようなことは他の国ではあまり見ることはありません。世界の多くの未伝国で、このようなコミュニティ支援を必要としています。中央アジアの助産婦としての仕事や、アフリカ、南アジアでの農業支援、東南アジアでのビジネス支援など、日本人のスキルと情熱は未伝国で働く為の多くのチャンスを与えるでしょう。

③ 3つ目の分野は**教会開拓**です。

日本人クリスチャンは教会開拓の必要性をよく理解していると思います。未伝の地域で新しく教会開拓をする苦勞や困難を経験しています。とにかく、使命と忍耐と継続が必要です。この性質こそ宣教地で必要とされるものです。たとえ困難な状況にあっても忠実に仕え続けることのできる人が必要です。ビザの更新を拒否されても、たとえ外国のスパイだと非難されても、たとえ外国のスパイだと非難されたことがありました。福音に興味を示すがわずかであっても、日本人は最後まで忠実に働きを続けると信じています。未伝部族の人々の間で働くには、このような人々が必要です。なぜ今日まで多くの部族がまだ未伝のままなのかというと、それは、そこに行って働くことが困難だからです。しかしなぜか日本人は困難をあまり嫌がることをしません。私は、神様は日本人を世界のもっとも困難と言われる未伝の地に送ることを願っておられると思います。日本人が世界宣教にこれからも携わる中で、必ず国内の働きも主がちゃんと進めてくださると信じています。

OMのミッションステートメント：

私たちの願いは、最も福音が伝えられていない人々の間で、イエスに従う者による生き生きとしたコミュニティが形づくられることです

- ・ OM (Operation Mobilisation) は、世界約110カ国で3200名が活動している超教派の国際的宣教団体です。OMは世界宣教のために奉仕者の育成と、最も福音が伝えられていない地域への伝道、そしてイエスに従うものによる生き生きとしたコミュニティが形づくられ、それらが育成されていくことを目標にしています。

OM日本・OM Japan

om.org/jp fb.me/omjapan info.jp@om.org

+81 (0)76-239-2830 (TEL&FAX)

〒920-0277 石川県河北郡内灘町千鳥台2丁目394

郵便振替口座 02100-0-24998 加入者名「OM日本事務局」

OM日本ニュース 第85号 2021年 冬
発行人：スティーブン スミスドルフ

編集&デザイン：近藤健二





6) 近隣教会の枝切り、草抜き、ゴミ掘り、窓拭きなどをします。地方の教会は牧師も信徒も高齢化しています。彼らのできないことをOMが提供することで、信頼関係を高め、横のつながりをつくります。
7) 三重県で唯一の北勢牧師会に参加しています。横のつながりづくりにかかせない場所です。8) ハンガーゼロ（日本国際飢餓対策機構）と組んでの災害対策セミナーも行いました。災害を通して、既存教会間の「一緒にやっぺいこう」感を高めます。

ムの派遣内容は、集会の中の証だけではなく、肉体労働もします。教会の枝木を切ったり、地面の整備、草抜き、軽トラックによるゴミ捨てと多種にわたります。このような作業をすることによって、各教会がOMに対して「使える＝仕える」というイメージを持ってくれるようになります。

他の活動

このほかに、“Family Chapel”という水曜夜の超教派礼拝&交流の場を提供し、月一回若者が構成する、世界宣教のための祈禱ナイト”Momentum”があります。

大切にしていること1 建物を持たない

超高齢化が社会問題となり、そして日本の既存教会が教会堂のメンテや財政で苦しんでいるのが現状で、特に地方では深刻です。三重県もその例にもれません。なので、私たちは機動性を重視し、「わざと建物を持たないで活動する」と決めました。私たちが建物をもたないことによって、三重の既存教会を助けに行けるからです。たとえば、私たちが自分の建物の雑草抜きに追われていたら、他の教会堂の助けに行けません。また、私たちが自分の建物にお金を使わなければ、他の教会の祝福に使うことができるからです。さらに、建物をもたないことによって、私たちが強制的に外の世界に出されることも大きなメリットです。宣教師が

教会堂の建物にこもってしまったら誰が未信者にイエスキリストを伝えるのですか？教会堂という建物から一步出てしまえば、いやがおうにも現実社会の中で世の光とならなければなりません。私たちの信仰生活と宣教も、現実社会の中で生かすことが大切だと思っています。

大切にしていること2 いろいろな形で宣教に貢献できる

神様が各人に与えた様々な賜物というものが大なり小なりあります。それは誰もが持っているはずなのですが、多くの既存教会・団体では「音楽ができる」「聖書を教える」「メッセージを語ることができる」という賜物に限定されているのが現実です。私たちは、IT技術、デザイン技術、大工技術、アウトドア知識、ホスピタリティー、調理などありとあらゆる賜物をみ国の建設のために用いようとしています。

大切にしていること3 当たり前にならない

三重県は教会の規模もクリスチャン人口も少ないです。またキリスト教内の大きな大会は必ずと言っていいほど、名古屋や大阪に依存しており、三重県内でもたれることはほとんどありません。このように、霊的に暗い三重県ですが、ひとつつ良いことがあります。それは、主に栄光を返すような活動／証／出来事がなにかあれば、どんなに小さくても、かなら

ず「主がしてくれた」と思えることです。そうなのです。三重のような働きがなかなか進まない暗闇にいと、ロウソクほどの光でも明るく見えます。どんなに小さくてもけっして当たり前と思わず、神様のおかげにします。どんな小さな働きでも、主に感謝することをこころがけるのです。こうすることによって、精神的な疲労、うつ、燃え尽き症候群、仲間割れをふせぐことができ、喜びをもって継続的に仕えることができると思っています。（もちろん完璧ではないですよ！）

知ろう

宮城チーム
Miyagi Team

富山チーム
Toyama Team

石川チーム
Ishikawa Team

三重チーム
& 東海エリア
Mie Team & Tokai Area

神奈川チーム
& 関東エリア
Kanagawa Team
& Kanto Area

OM日本は国内の5箇所で活動

OM日本は長年、日本人を海外に送り出すために、事務局のある石川県で活動をしてきました。2011年、東日本大震災を機に、国内の日本人の救霊のためにはたらき始めました。現在は石川県、富山県、宮城県、神奈川県、三重県の5箇所で。



@logoshope



左：アフタースクールでの賛美リード 上：ロゴスの入場の為に港で並ぶ人へのゴスペルライブ 右：ジャマイカの教会でのメッセージ

あなたの教会でロゴスホープ号の証を聞きませんか？

船越 信哉

2019年9月、ロゴスホープ号を下船し日本に帰ってきました。

帰国後、日本各地の教会を訪問させていただいています。訪問先の教会では、ロゴスホープ号の証、また世界宣教についてイエス・キリストの情熱を分かち合っています。

コロナの中でしたが、主がこの一年の働きを守り祝福してくださり、およそ40教会を訪問することができました。多くのクリスチャンと出会い、ともに心燃やされて世界宣教のために祈りました。また世界宣教に参加し、ロゴスホープ号へ乗船する日本人クリスチャンも起こされています！

新しい1年も、日本各地の教会を訪問させていただきたいと願っています。ロゴスホープ号や世界宣教に興味や重荷のある方・教会はぜひ声をおかけください。どこへでも参ります。



連絡先
Eメール：
shinya.funakoshi@om.org
携帯： 080-4485-4942
LineID: shinyafunakoshi

船越宣教師のスケジュールを
見てみよう！



2018年9月から2020年7月までの約2年間、
ロゴス・ホープ号に乗船した額田潤君の証です

華やかに聞こえるけど

皆さんはロゴス・ホープ号（以下ロゴス号）をご存じでしょうか。知識、援助、希望を届ける為、世界を巡回している宣教船です。クルーは全員がクリスチャンで、ボランティアとして乗船しており、世界中から集まった文字通りのインターナショナルな船です。ロゴス号の具体的な働きは、知識の提供の為、船内にある書店での低価格な本の販売、現地の図書館などへの本の寄付。また生活の援助の為に、水を濾過するバケツや眼鏡、靴などの寄付。そして希望とは、「イエスキリストが唯一の神であり、我々人間を愛して下さっている」という事実を、船内のカフェや船外の学校、公園など至る所に出向き伝えていきます。その他にも船の運営の為にクルーは料理や掃除、洗濯、エンジンの管理など、様々な部署に配属されて、ロゴス号を動かしています。

私にとってロゴス号で生活した2年間は、何にも変えがたい多くの経験を積む時となりました。

一つは冒頭でも書かせて頂いたように、インターナショナルな環境での共同生活です。ロゴス号には、約60ヶ国の、約400人のクルーがいて、英語を共通言語としています。このような環境で生活すると言語力も上がり、また日本の文化を客観的に見る事ができ、自分の文化の長所や短所に気づく事ができました。また、文化の大きな影響力についても学ぶ事ができました。日本に帰ってからロゴス号での経験を生かして、物事の捉え方、自分の何気なく思う常識について改めて考えるようになりました。私は日本のクリスチャンの家庭に生まれ育った為、日本のクリ

スチャン文化が私の文化、そして私の常識となっていました。そしてその文化にそぐわない事は、どこか否定や拒絶をしていました。しかし今は常に、「なぜ」から物事を考えられるようになりました。

“深く落ち込んで立ち直るのが難しい時もありました。ですが主は様々な形で私を励ましてくださり、私を成長させてくださいました”

もう一つは、神様への信頼がさらに深くなった事です。ロゴス号でのインターナショナルな生活や、船で世界を回るのは一見華やかに聞こえます。しかし華やかな反面、ロゴス号はトレーニングの場所でもありません。なぜならロゴス号の生活は日々挑戦の生活だからです。船内では英語、船外では現地語という言葉の壁、文化の違う人々と船内の特殊な環境での生活や役割。挑戦した事が上手くいく事もあれば、上手くいかないときがあります。自信があっても上手くいかないときや、思い通りの結果が得られないときもあり、深く落ち込んで立ち直るのが難しい時もありました。ですが主は様々な形で私を励ましてくださり、私を成長させてくださいました。

私はロゴス号で生活する時を与えてくださった神様と、それを実現するために支えてくださった周囲の方々に深く感謝しています。